

時の話題

がんの話題(10)

—セカンドオピニオン外来—

医療法人 幸良会 シーピーシークリニック 武 元 良 整

「セカンドオピニオンとは？」

病名を告げられた後、治療法の選択に迷った時に主治医とは別の専門医の意見を求めること。日経新聞の調査によると(2007年1月7日、日曜)病院として「セカンドオピニオンを希望した患者に積極的に対応する」と答えた病院は59.2%との結果があります。

「どこで受ける？」

セカンドオピニオン外来はがん領域中心に全診療科に急速に普及してきました。2006年の4月から、患者資料を提供する紹介医には保険診療が認められています。この1年間で、全国のがん拠点病院には必ず、セカンドオピニオン外来が設置されるようになりました。2007年1月現在、複数診療科で対応しているのがん拠点病院としての以下の2施設です。その他の複数の医療機関名は省略します。

1. 鹿児島大学病院 (<http://www.kufm.kagoshima-u.ac.jp/~hosp/t-page/secondopinion2.pdf>)
2. 鹿児島医療センター (<http://kagomc.jp/second/index.html>)

「相談者が増える理由は？」

1. 高齢化に伴い、がん患者が増加した。
2. インターネットの普及でより多くの医学情報が容易に入手可能。
3. その結果、複数の治療方法に迷うため、自己決定権の行使が必要。

さらに最近の流れとして、医師と患者間のコミュニケーションを重要視する世論の後押しが強くなってきました。相談を希望する方がおられ、かつ、相談を受ける医療機関の理解と担当スタッフが必要です。この両者は増加中です。具体的には有名人が自分の病名を公表し、闘病することが一般化されてきました。最近では、お笑いの方がさい帯血移植まで受けて、その後、不幸にして亡くなれましたが、歌舞伎の方は新しい治療法により舞台への復帰を遂げられています。このように、がんに限らず、すべての病気に「セカンドオピニオン外来」という用語がメディアに登場する機会が増え、医療機関が外来を設置し、対応してきたことなどが考えられます。医療の進歩に伴い、治療法がないとされた難病でも、現在は複数の治療選択肢が示せるようになりました。さらに、白血病の中でも一部はすでに、病態が解明され治療が期待されるようになっていきます。

「造血細胞移植セカンドオピニオン外来の実際」

以下に造血細胞移植相談外来の現状を紹介いたします。鹿児島市医師会病院の造血細胞移植（骨髄移植・末梢血幹細胞移植・さい帯血移植・非血縁者間移植・自家移植）に関するセカンドオピニオン外来受診者は、2005年4月から2006年8月まで、計20名です。その後、アンケートにて追跡できた16名の結果を以下に示します。相談者の背景としては年齢が18歳から73歳。まず、外来受診のきっかけは1. 主治医にすすめられた72%、2. 周囲からアドバイスを受けた28%、3. 自分から希望された方はおられませんでした。相談時間は平均60分です。すべての方が移植適応でした。図1は16名の基礎疾患です。

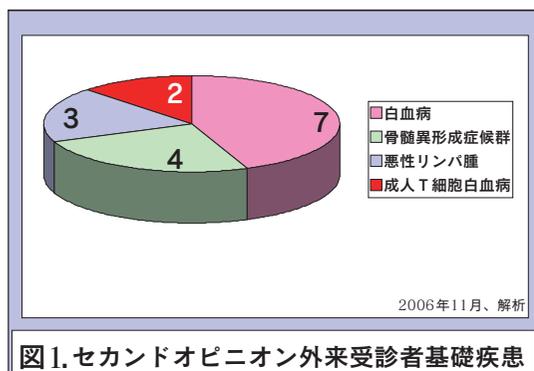
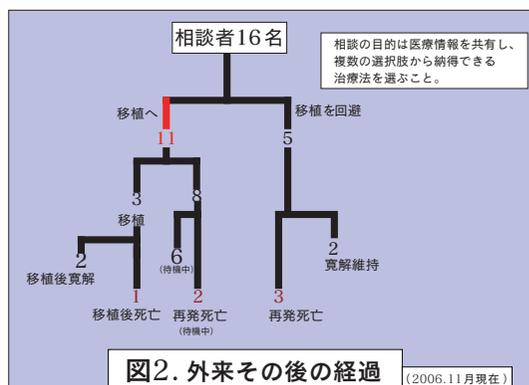


図2. に示しますように、追跡結果では移植へ向かわれた方が16名中11名(69%)おられ、移植終了したのは3名。そして8名のうち移植待機例が6名です。2名は、移植が間に合わず再発死亡されました。相談日から移植または移植予定日までの期間の中央値は約6カ月でした。移植はとりあえず、回避された5名中、寛解をその後も維持されている方が2名、その後に再発し死亡された方が3名です。相談後に再発を



来した7例の方の相談外来受診から再発までの中央値は約2カ月と短期間でした。

要約すると、移植を相談者が希望し、移植までに要する期間が6カ月、一方、相談後に再発した方は、外来受診から再発までの期間が約2カ月でした。これは白血病の特徴として病状進行が早い事を示しています。相談外来受診後1年以内に16名中6名がすでに死亡されています(図2)。血液疾患はいつも時間との勝負です。診断時から移植を治療選択肢の1つとした計画を主治医が呈示し、移植のタイミングを逃さないようにすることが大切です。

「早期移植の有効例」

早期の移植が有効な疾患が明らかにされました。それはフィラデルフィア染色体陽性急性リンパ性白血病(Ph+ALL)です。2006年2月の移植学会の報告ではPh+ALL診断後7カ月以内の早期の移植成績は72%と驚異的でした。一方、7カ月以後の移植による生存率が20%です(<http://www.celltherapytransplantation.com/> EBM37から引用)。今後は早期移植のため、「さい帯血」による移植も選択肢の一つとなる可能性があります。今後の研究成果が待たれます。